

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第25号 (2005年10月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001936

国語研の窓

25号

平成17年10月1日 第25号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会
〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2
電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334
URL <http://www.kokken.go.jp/>



東側ベランダから見た昇る月

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：日本語を地図にする 2
- 解説：現代の書き言葉はどのようにして確立したか 4
- 第26回「ことば」フォーラム報告 6
- ことばQ&A 7
- 新刊 7
- お知らせ：「ことば」フォーラム、公開研究発表会 8

暮らしに 生きる ことば

仙台市控木通

仙台市に控木通（ごうらきどおり）という地名があります。近くには、



陸奥国国分寺跡があって、古くから開けていた土地です。現在は閑静な住宅街です。その一角に控木通の地名由来を記した石碑が建っています。

碑文には次のようなことが書いてあります。昔、この地には大人が数人で囲むほどの古木があり、幹の中が空洞になっていました。がらんだうのことを仙台の言葉で「ガホラ」といったため、この木は「ごおらの木」と呼ばれました。そして、「控」という文字を作って地名にあてたと伝えられています。中がからっぽの木だから、木と空とを組み合わせると新しい文字を作ったという字源説です。方言に由来する地域文字となります。

ところが、「控」と同じ形の文字が『大漢和辞典』に見つかります。漢の時代に編集された『説文解字』

にまでさかのぼることができ、音はコウ、中がからになっている打楽器をあらわす文字です。しかし、この文字と、控木通の「控」とは他人の空似のようです。

さて、「控」の字はコンピュータで扱うことができます。コンピュータに標準的に登載する漢字は、JIS X 0208 という工業規格で決められています。このJIS規格を作る際に地名文字の資料を参照し、「控」の字はこの時に採録されました。典拠は仙台市の控木通でした。「控」の字は、控木通の地名をあらわすためにコンピュータにあるのです。

控木通を歩いていたとき、電信柱の看板に「控木通」と書かれているものを見つけました。木へんと手へんは、筆写の際に混用されることがありますが、「控」となると全く別な文字になってしまいます。試しにインターネットの検索エンジンで「控木通」と入力してみると、いくつか用例を探しあてることができます。いずれも「控木通」の誤用です。「控」の字が使われていないのはたいへん残念なことです。

(高田 智和)

日本語を地図にする

日本語の中の異なり

同じことを表現するのにも、土地によって言い方が違うことがあります。例えば「昨日は役場に行かなかった」と言うときの「行かなかった」を関西地方では行カナンダとか行カンカット、中国地方では行カザッタと言います。同じ日本語でも、「なかった」に当たる部分にナンダ・ンカット・ザッタなど、いろいろな言い方があるわけです。このような異なりは、方言による違いと呼ばれます。

方言データの表示方法

「関西地方」とか「中国地方」と書きましたが、それでは大雑把です。そこで、使われている場所を地名で示し、語形との関係を次のように一覧にすれば、正確になると考えられます。

- ナンダ 京都府竹野郡丹後町肯安
- ナンダ 兵庫県美方郡温泉町湯
- ナンダ 滋賀県伊香郡西浅井町塩津浜
- ナンダ 三重県員弁郡藤原町坂本
- ナンダ 大阪府豊能郡能勢町吉野
- ザッタ 島根県隠岐郡五箇村大字北方字岳野
- ザッタ 広島県山県郡大朝町字間所
- ザッタ 山口県阿武郡須佐町下三原上
- ザッタ 鳥取県東伯郡大栄町大字由良宿
- ザッタ 岡山県新見市菅生西谷
- ザッタ 愛媛県東予市周布
- ンカット 新潟県佐渡郡相川町下相川
- ンカット 富山県東礪波郡利賀村利賀
- ンカット 山口県阿武郡須佐町下三原上
- ンカット 大阪府泉南郡阪南町鳥取
- ンカット 三重県志摩郡大王町波切
- ンカット 宮崎県東臼杵郡北浦町大字古江字地下

確かにこれはこれで正確かも知れません。しかし、それぞれの語形の使われている場所を把握するのが困難です。それは、地名とその位置がすぐに結びつかないからです。そんなときに役に立つのが地図です。住宅地図などを見ると、そこにあるのが誰の家なのかとか、店の名前が何なのかが分かるようになっています。それにならって、地図の上に方言の語形を書き込んでみましょう。

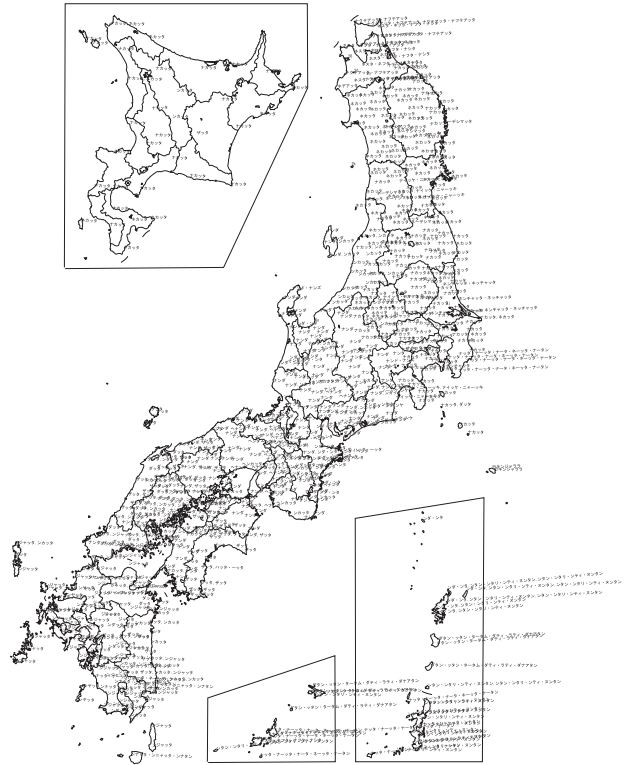


図1 「(行か) なかった」の各地の語形

なんだかゴチャゴチャして、よけいに分からなくなってしまいました。

方言地図

地形図のような地図では、「文」で小中学校、「◎」で役所、「卍」で寺院のように記号でその場所にあるものを表現しています。

この方法を参考にして、方言の語形を記号に置き換えてみましょう。ただし、方言の形は、何を対象とするか（ここでは「(行か) なかった」を扱っていますが、「(行か) ない」や「(行き) たい」「(行き) たかった」「行け」など、ほかにも様々な対象が考えられます) によって、かなりの数にのぼりますので、地形図のように一定の手順で記号を与えることはできません。

そこで、まずは、「(行か) なかった」に当たるナンダ・ンカット・ザッタなどを分類・整理します。そして、例えば、ナンダの仲間には赤色の長方形を与えることにし、その上で、ナンダの仲間どうしの

違いは、塗りつぶし方などで区別することになります。このような手続きを順次ほどこし、語形を記号に置き換えて地図にしたのが、図2です。

これだと分布がよく分かります。東日本には、共通語形のナカッタ類が広く見られます。ナンド類は、近畿を中心としながら、東は中部、西は中国や四国の一部にまで広がっています。ザッタ類は、ナンド類の西側に見られ、ンカッタ類はナンド類やザッタ類をとりまくように分布しています。

ここに挙げた地図は、国立国語研究所が編集している『方言文法全国地図』の中の一枚を簡略化したものです。『方言文法全国地図』には、より詳細な地図が300枚以上収録されています。

方言地図から分かること

それでは、このような方言の地図から何が分かるのでしょうか。

これまでおもに分析されてきたのは、言葉の歴史です。詳しくは、解説するスペースがありませんが、地図から読み取ることのできる歴史は、「(文化的)中心地の歴史」と「各地の歴史」に分かれます。分布をもとに両方向から歴史に接近することができます。興味のある方は、ともに国立国語研究所編集の『新「ことば」シリーズ 16 ことばの地域差 方言は今』や『ことばビデオシリーズ 3 方言の旅』などを参考にしてください。

また、これからは、GIS(地理情報システム)を応用して、方言の分布と地形や人口密度といった言語以外の地理的情報とを比較する研究も盛んに行われるようになることでしょう。

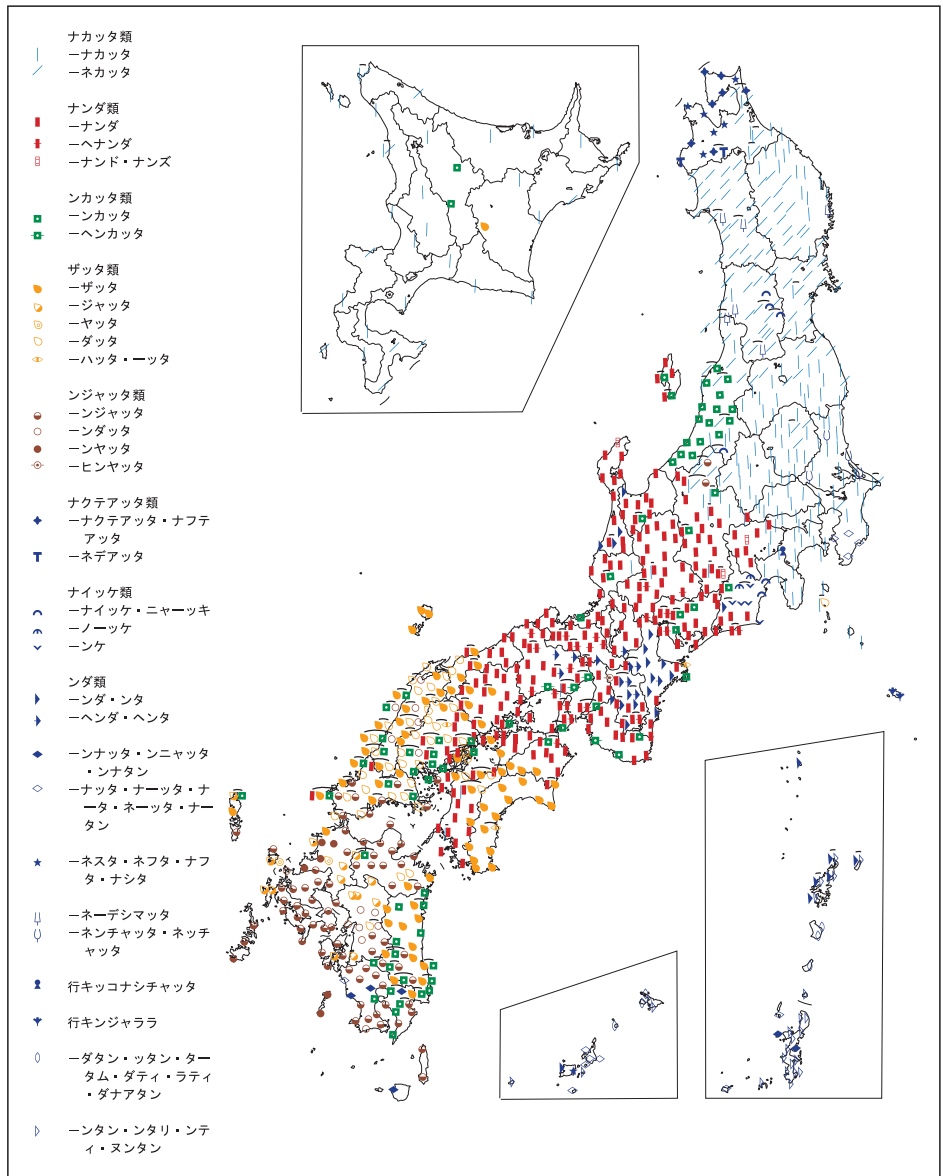


図2 「(行か) なかった」

(大西 拓一郎)



『新「ことば」シリーズ16 ことばの地域差 方言は今』

(国立印刷局)
483円(税込み)



『ことばビデオシリーズ3 方言の旅』

(東京シネビデオ)
15,750円(税込み)

現代の書き言葉はどのようにして確立したか

— 『太陽コーパス』の活用例から —

1. 『太陽コーパス』とは

現代の書き言葉は、19世紀末期から20世紀初期に進んだ言文一致を通して、大体の形をなしました。国立国語研究所は、現代の書き言葉がどのようにして確立していったのかを、多角的に調査することができる『太陽コーパス』を作成し、このほどCD-ROMで刊行しました。

コーパスとは、書かれたり話されたりした生の言葉を体系立てて大量に集積し、コンピューターを通して自在な検索や抽出ができるように整備したデータベースのことです。『太陽コーパス』は、雑誌『太陽』（博文館刊）を対象とするものですが、『太陽』は、当時の日本人にもっともよく読まれ、記事ジャンルの非常に広い月刊の総合雑誌で、この時期の書き言葉資料として、価値の高いものです。

経年的な言葉の変化をとらえることができるように、1895（明治28）年、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年、1925（大正14）年を対象にとり、それぞれの年の全文をコーパスに入れました。総文字数は約1450万字、記事数約3400本、著者数約1000人の規模になります。図2に明らかなように、当初はほとんどすべての記事が文語文であったところから、次第に口語文に置き換わっていき、ほとんどすべてが口語文になるところまで、言文一致のほぼ全過程をとらえることができます。

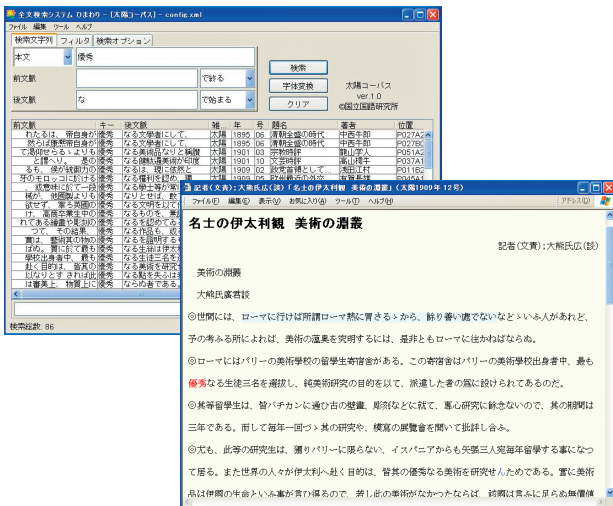


図1 『太陽コーパス』で「優秀」を検索した画面

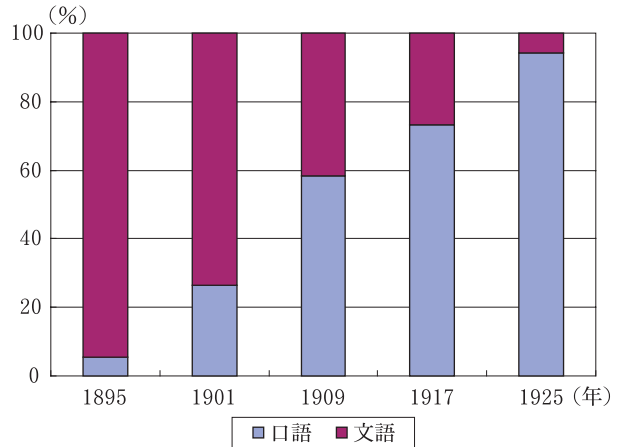


図2 口語記事と文語記事の比率

2. 『太陽コーパス』でとらえる書き言葉の確立過程

『太陽コーパス』の刊行と同時に、これを活用した、現代の書き言葉の確立過程についての研究を集成した論文集も刊行しました。この本のなかから三つの研究を紹介します。

(1) 濁点表記法の完成

例えば、「喜ぶ」の「ぶ」に濁点文字を使うことは現代語では当たり前ですが、19世紀までは「喜ぶ」のように濁点をつけない文字を用いることも一般的でした。この濁点文字の使用率を、『太陽コーパス』の中のすべての語について調べると、図3のようになります。

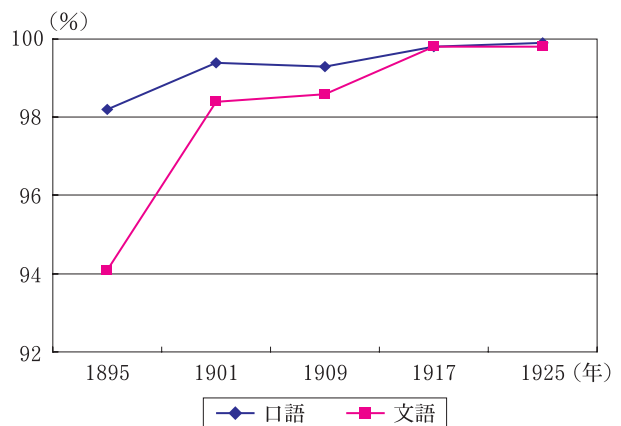


図3 濁点文字使用率

1909年までは、濁点を付けない文字を使う場合もあったこと、1917年にほとんどの場合に濁点文字を使用する現代の表記法が完成したことが見て取れます。そして、文語文よりも口語文の場合の方が、濁点文字使用の普及が早く進んだことも分かります。

(2) 文語語法から口語語法への移行

言文一致の進行によって、書き言葉として用いる表現法が、旧来の文語的な語法から、話し言葉に根付いた口語的な語法へと徐々に移行しました。図4は、可能を意味する表現法四種について、その頻度(出現回数)の経年変化をまとめたものです。黒線は、口語記事の比率を示しています。

口語的な「出来る」が、口語記事の増加と軌を一にして急速に増えていき、文語的な「能ふ」「動くこと能はず」などや「を得る」「動くを得ず」などは減っていきます。一方、「し得る」「動き得ず」などは文体の変化に影響されずに同じ程度に使用され続けていることも注目されます。文体の変化にともなって、可能表現のしくみが変わっていったと見られます。

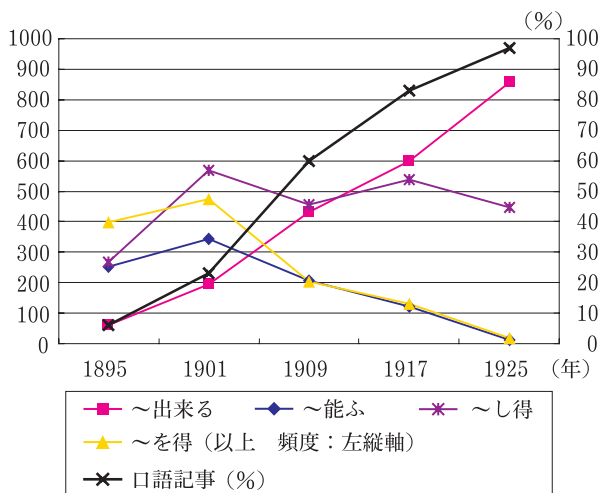


図4 可能表現法の頻度

(3) 新語の定着

近代に誕生あるいは流入した新しい言葉が定着していく過程も、『太陽コーパス』によって詳しく知ることができます。図5は、「優秀」という漢語の頻度の経年変化を、類義語とともに示したものです。当初はほとんど使われていなかった「優秀」が、1901年から1917年の間に一気に定着に向かう様子が際立っており、1909年以後は、旧来からよく使われていた和語「すぐれる」とほぼ同じ程度に使われるようになっていきます。

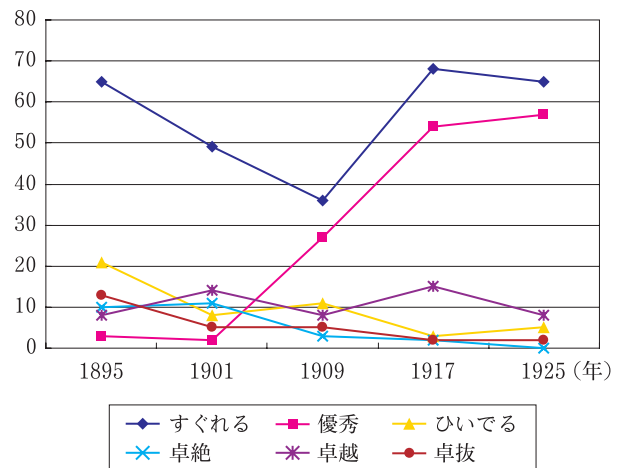


図5 「優秀」とその類義語の頻度

「優秀」と「すぐれる」の使用文脈を比較してみると、「すぐれる」が人物の内面に備わる才能に関して使われやすいのに対して、「優秀」は人物が生み出す外面的な成果に関して使われやすく、意味によって使い分けられていることが判明します。新しい言葉が、独自の役割を担って、日本語の中に場所を得ていく様子を知ることができます。

論文集は、このほかにも様々な研究成果を掲載し、コーパスの設計や利用方法についても詳しく解説しており、『太陽コーパス』を活用する手引きとしても読んでいただける内容になっています。

多くの人に『太陽コーパス』が活用され、様々な視点から活発な研究が行われることを願ってやみません。
(田中 牧郎)

『太陽コーパス』と論文集は、書店で注文できます。販売についてのお問い合わせは、博文館新社(電話 03-3811-4721)まで。

- ・国立国語研究所編『太陽コーパス — 雑誌『太陽』日本語データベース —』(国立国語研究所資料集15), 2005年3月31日, 博文館新社刊行, CD-ROM 1枚+解説書 A5判横組み56ページ, 税込み9,975円
- ・国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究 — 『太陽コーパス』研究論文集 —』(国立国語研究所報告122), 2005年3月31日, 博文館新社刊行, A5判横組み414ページ, 税込み7,875円

第26回「ことばと国際理解」

■参加者は約180名、満員盛況での開催

国立国語研究所が立川市に移転して2回目の「ことば」フォーラムが、武蔵野市国際交流協会との共催で、7月30日（土）午後、武蔵野スイングビルのレインボーサロンで開催されました。

■「国際理解の促進」という観点から言語の教育の在り方について考える

当日は以下の3件の発表・発題がありました。

1 国語教育の立場から

— これからの時代に求められる国語力について

氏原基余司氏（文化庁国語課）が文化審議会（国語分科会）の答申要約を引用しながら「これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策」について自身の教員経験も踏まえながら展望しました。具体的には、国語力をつけることと、社会・文化・地域や家族との関係性などを基盤にした「情緒力」の育成とは密接な関係にあり、さらにこの「情緒力」を育むことが、論理的思考力を伴う健全な知的活動にもつながっていることなどについて語りました。

2 日本語教育の立場から

— 日本語教育の可能性と醍醐味

野山広が日本語学習者数の増大と多様化の状況を踏まえながら、将来到来するであろう「多文化共生社会」に対応した日本語教育の在り方について触れ、その可能性、困難さ、醍醐味についてビデオによる事例の紹介も交えながら言及しました。具体的には、昨年、総務省が重点施策の中で初めて「多文化共生社会」という用語を用いたことや、日本経済団体連合会が外国人受入れ問題に関する報告書の中で「多文化共生庁」という新省庁（機関）の設置を提言したことなどを取り上げながら、国際理解や共生社会に対する意識の高まりを紹介するとともに、国語・日本語・英語（外国語）教育の連携の重要性を改めて指摘しました。

3 英語教育の立場から

— 国際理解のための英語教育

松本茂氏（東海大学教育開発研究所）が英語の授業、教科書の問題点、変化が遅い現場の現状について語りながら、こうした状況に対応し英語教育の改

善に取り組む文部科学省の様子や、「英語が使える日本人」育成のための行動計画などについて触れました。そして、今後の課題として、コミュニケーションを基盤とした言語の教育の展開を挙げました。具体的には、英語を使用する活動を積み重ねつつ、対話力・コミュニケーション能力をより育むために、教室での活動だけで完結せず、地域とのつながり（ネットワーク）を強化しながら、Project-Based-Learning など日常の関係作りの中で、英語を使う必然性の高い場面をより多く作る工夫をすることが肝心であり、こうした活動こそが意味ある学びとなっていくことを指摘しました。

■「たじろがない」「おたおたしない」姿勢や心構えの重要性

フォーラムの後半では、コメンテータの杉戸清樹（国語研究所長）と山西優二氏（早稲田大学）から、「言葉の多様性に対して『たじろがない』『おたおたしない』柔軟な姿勢や心構えを持つことが、国際理解のためには肝要であること」や「言葉そのものと文化の関係について、人と人との対話や関係作りの中からより深く理解しあうことが重要であること」が指摘されました。その後会場からの質疑に対して発表者から応答が行われました。最後に、国際理解につながる言語の教育とは「ことばを学ぶことを通して自尊感情を培い、共感・信頼関係を他者と作れるようになることであり、ひいては共生社会の構築や平和の実現にもつながる教育」であることが確認されました。

（野山 広）



ことばQ&A

※このコーナーは、当研究所に寄せられた言葉についての質問をもとに作成しています。



質問 結婚式で親類を紹介したり、席次に名前や肩書きを書いたりするときの「きまり」はありますか。



回答 この問題は言葉の規則としての「きまり」というより、むしろ言葉の文化や生活上のしきたりとしての「きまり」に属することがらと考えるとよいでしょう。

例えば両家の親類が初めて顔を合わせる場面で、新郎の祖父の長兄を何というか、といった質問があります。回答としては、「大伯父（おおおじ）」ですが、書き言葉で席次にそう書いて通じるかということ、「大伯父」とはどう読むのか、「ダイハクフ」か、といった別の疑問を生んでしまうでしょう。話し言葉でも「おおおじ」と紹介しても聞きなれない上に親族の中での位置づけは、即座にはわからないでしょう。実際にはこの質問を、新郎の祖父の長兄を「何と言うか」、ではなく「どう紹介したらよいか」と考えれば、特別な用語を用いなくて「祖父の長兄」にあたる誰それ、とすればすんでしまいます。

しかし、改まった場面では特別な言葉をつかって丁寧に言わなくてはならないのではないかと、いっ

た考え方が起こりがちです。

ほかに、「ジナン・ジジョ」として戸籍通り「二男・二女」と書いてよいかどうか、そう書いてあるのをどう読めばよいか、といった質問もあります。言葉の規則に照らしてみれば、公的な漢字表記では「ジナン・ジジョ」は「次男・次女」だけで、「二男・二女」は「ニナン・ニジョ」という語に見なすことになります。でも話し言葉で「ニナン」と呼んで通じるでしょうか。戸籍の表記と話し言葉で使う言葉とは、違って当然といえます。

さらに席次で姓名を詳しくせず、従来「〇〇様令夫人（様）」としたけれど、妻を公的な立場で招待する場合、その夫を何と呼ぶか、などという質問も寄せられています。

長寿社会や、親類関係の変化、あるいは男女の社会参加の変化など、人間や社会の「いとなみ」のところが、今までの言葉の習慣に先んじている、ということでもありましょう。

間違っていない、恥かしくない「言葉のきまり」を知ることは大事ですが、時には「生活」と「言葉」のかかわりを見直す必要もありそうです。

（山田 貞雄・塚田 実知代）

新 刊

全国方言談話データベース

『日本のふるさとことば集成 ― 第9巻 岐阜・愛知・三重 ―』（国立国語研究所資料集13-9）
2005年10月／国書刊行会／冊子（A5判横組み283ページ）、CD、CD-ROM／税込7,140円

園芸用語に「グランドカバー（グラウンドカバー）」というものがあります。芝をはじめ色々な種類の草木で地面を覆ったり、外壁・フェンスなどを蔓状の植物で覆うことを指すのですが、場合によっては植物自体をいうこともあるようです。丈夫で繁殖力が強い種類を選べば、緑が豊かになるだけでなく、雑草を抑えたり土の乾湿を調整する効果が得られます。国語研究所中庭（24号表紙の写真）には、右の2種類がグランドカバーとして使われています。



◀フッキソウ（富貴草）

ツゲ科

名は繁殖力が豊かであることに由来し、別名キチジソウ（吉祥草）ともいう。



リュウノヒゲ（龍鬚）▶

ユリ科

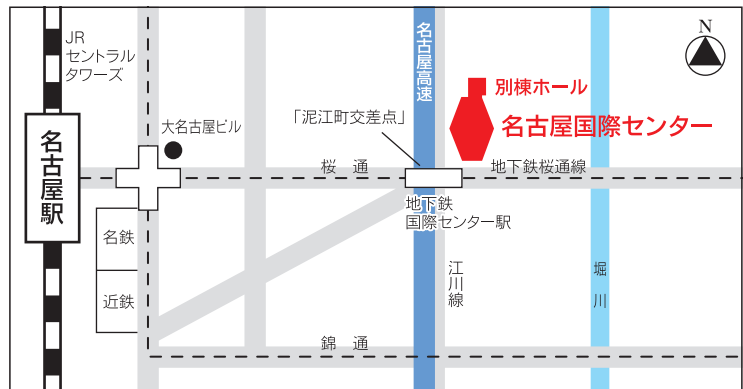
ジャノヒゲ（蛇鬚）ともいう。

第28回「ことば」フォーラム 「外来語の過去・現在・未来」

最近、「コンプライアンス」「ノーマライゼーション」などといった難しい外来語が新聞や広報紙に使われていて、意味がよく分からないといった声が聞かれます。その一方、「コップ」「バス」「カレンダー」などのように、私たちの言語生活にとって欠くことのできない外来語も数多くあります。

そもそも、外来語とはどういう言葉なのでしょうか。それらは日本語の中でどういう役割を持っているのでしょうか。今回のフォーラムでは、外来語の「過去・現在・未来」という視点から、その長所と短所、日本語の中に定着する仕組み、将来像などについて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

日 時：2005年11月5日（土）
午後1時30分～4時（1時開場）
場 所：名古屋国際センター 別棟ホール
（名古屋市中村区那古野 1-47-1）
定 員：200名
（入場無料，申し込み制，先着順）
【登壇者】 水谷 修（名古屋外国語大学長）
清水義範（作家）
杉戸清樹（国立国語研究所長）



【申し込み方法】 氏名・連絡先・参加希望人数を下記までご連絡ください。

国立国語研究所「ことば」フォーラム係
電話：042-540-4300(代) FAX：042-540-4456 E-mail：forum@kokken.go.jp

詳しくは、国立国語研究所のホームページ (<http://www.kokken.go.jp>)，ポスター，ちらしを御覧ください。

国立国語研究所公開研究発表会 「シソーラスの^{へんさん}編纂と活用」

日 時：2005年12月17日（土） 13：00～17：00
会 場：国立国語研究所講堂（2階）
内 容：近年、『類語大辞典』(講談社)，『日本語大シソーラス』(大修館書店)，『類語例解辞典（新装版）』(小学館)，『分類語彙表（増補改訂版）』(大日本図書)など、日本語のシソーラス（語句を意味によって分類・配列したもの）や類語辞典が相次いで刊行され、シソーラスへの関心が高まっていることをうかがわせます。今年度の公開研究発表会では、シソーラス編纂の方法や語彙分類の基準について発表・報告を行います。また、利用においてはどのような情報の付与が期待されるかなど、編纂・活用の両方の立場からの意見交換を通して、次世代のシソーラスの可能性について考えます。

【プログラム】

〈講演〉

山口 翼^{たすく}（『日本語大シソーラス』編者）

柏野和佳子（国立国語研究所）

山崎 誠（国立国語研究所）

〈パネルディスカッション〉

黒橋 禎夫（東京大学）

渋谷 徹（共同通信社）

松澤 和光（神奈川大学）

村木新次郎（同志社女子大学，『類語例解辞典』編集委員）

山口 翼

柏野和佳子

※シソーラスを用いたソフトウェアなどのデモンストレーションもあります。

◇問い合わせ先：公開研究発表会部会 E-mail：ameeting@kokken.go.jp FAX：042-540-4333(代)

◇参加費，申し込みは不要です。